

雛人形の種類には数種類ありますが、資料館で所蔵している雛は「古今雛」「享保雛」「芥子雛」「立雛」の4種類です。男雛・女雛は江戸時代に作られたものですが、雛道具や一部の人形には明治期・大正期など年代が違うものが混じっています。これは、江戸時代～明治時代は雛人形をセットで買わず、一体一体購入し、買い足していた為です。

『酒田雛街道』に参加している施設では上記種類のほか、まんまる顔の「治郎左衛門雛」など個性豊かな雛を展示しています。また、「胡蝶の舞」を踊る人形や、豪華な「御殿」に座る雛もあります。江戸時代に西廻り航路で栄えた土地らしく、酒田には多種多様な雛が残されています。顔立ちや服装に注目しながら、酒田各地のお雛様をご鑑賞下さい。

■ 古今雛（橋本家のお雛様）（京都製 江戸時代後期製作）

「上喜元」蔵元・橋本家旧蔵の豪華な雛人形です。平成22年に橋本家より資料館へ寄贈され、以後、資料館を代表する雛となっています。雛の目じりは雅な京都製らしく弓なりになっており、上品な顔立ちです。「古今雛」と呼ばれる雛は江戸の人形師・原舟月によって作られたのが始まりで、大流行しました。

■ 芥子雛

上記雛と同じく橋本家より寄贈された小さな雛です。10センチ弱～それ以下の大きさの雛を「芥子雛」といいます。江戸時代、豪華絢爛に進化し続ける雛人形を規制する為に、幕府は大きさや華美さに規制を設けますが、これが逆に雛人形製作者に火をつけ、趣向を凝らした小さな雛人形が作られました。精密に作られた芥子雛は人気を博しましたが、他の雛人形同様、幕府に規制される事になります。

■ 享保雛（江戸時代製作）

古今雛が登場する以前から作られている雛で、最盛期は名前の通り享保年間（1716～1736）ですが、明治になっても作られていた人気の雛です。特徴は綿を入れてふっくら膨らんだ袖と袴・気品ある能面のような顔立ちです。大型のものが多く作られ、高さ50センチ以上の雛も存在します。

■ 立雛（江戸時代製作）

雛人形の元となった、紙で出来た人形です。平安時代に行われていた「雛あそび」は、人形（ひとがた）に穢れを移して川に流し、無病息災を願うもので、これが徐々に進化して現在のような雛祭りとなります。「源氏物語」の文中では光源氏が須磨の海に人形を流しています。古今雛も享保雛も、この立雛を源流としています。

●お雛様の規制

紙で出来た立雛から享保雛、そして古今雛と、時代とともに豪華・大型になってゆく雛人形ですが、そうした風潮を幕府が見逃しませんでした。たびたび儉約令が出される中でも人々は雛を楽しんでいましたが、古今雛が大流行した18世紀末期、松平定信により、徹底的な儉約を推し進める「寛政の改革」(1787~1793)が始まります。この改革は幕府財政を改善する為に進められましたが、武士達だけでなく町民の暮らしにまで規制が及ぶようになります。当然豪華絢爛な雛人形も規制対象となり、大型の雛人形が製作禁止となりました。それに負けじと職人たちが工夫を凝らし、ちいさくも手の込んだ芥子雛が人気となりました。芥子雛もすぐに規制となりましたが、幕府と町人のやり取りからは、人々が雛人形にかける熱意が伝わります。

●西廻り航路と雛人形

江戸時代、酒田は西廻り航路(米などの物資を円滑に江戸・大阪へ運ぶために整備された船のルート)の重要な寄港地として栄えました。山形全域から江戸へ運ぶ米・紅花などが集まると同時に、江戸や京都・大阪などからも焼き物や着物・工芸品などが流れ込みました。現在県内で古い雛人形を見る事が出来るのは、江戸時代に沢山の雛人形が酒田の豪商の元に運ばれてきたためです。

酒田は京都・大阪との交流が盛んだった為、京都製の雛が多く流通し、町人に愛されました。京都製の雛は西廻り航路を進む船に乗り、手を加えられる事無く酒田に運ばれました。反対に江戸製の雛はパーツごとに小さく梱包され、山を進む陸路を通過して運ばれました。部品が無事到着したら、庄内の人形師が人形の形に組み立てるのです。

最上川沿岸にある大石田町は、最上川を渡る川船が停泊する“駅”として賑わった土地です。河北町は江戸時代に紅花貿易で栄えました。成功した商人も数多く、大石田町・河北町の家々には貴重な雛人形が残されています。

●お雛様のみぎ・ひだり

「男雛」「女雛」の左右ですが、古くから決まっている配置はありません。しかし、関東では向かって右が女雛・左が男雛で、京都では右が男雛・左が女雛です。なぜ左右が逆なのか。これは昭和天皇の即位式の並び方が、向かって左が天皇・右が皇后だったからで、これを東京の人形関係者が参考にしたといえます。しかし御所のある京都では古くからの「左が上位」(向かって右)という考えが根付いています。左右どちらに飾るかは、雛人形の産地・時代にあわせるといいかもしれません。

また、上記の通りですので老齢の左大臣は、若い右大臣よりも上位となります。雛道具の桜と橘はそれぞれ「左近の桜」「右近の橘」が正式名称です。向かって右に桜・左に橘を飾りましょう。現在も左近の桜・右近の橘は京都御所に植えられています。

(参考：藤田順子著／雛の庄内二都物語)